



アネ・フランク 心の旅路

Anne Frank: Een Zieletocht

谷口長世

講談社

アネ・フランク 心の旅路

Anne Frank: Een Zieletocht

谷口長世



■著者略歴

谷口長世（たにぐち・ながよ）

1949年、名古屋市に生まれる。

1976年、東京外国語大学フランス語科卒業。東京大学新聞研究所研究生となり、出版社の史料・資料研究に従事。

1978年、ベルギー政府国費給費生として、同国ブリュージュ市の欧州大学行政課程に留学。

1981年、毎日新聞ブリュッセル通信員となり、EC、NATO、ベネルクス三国を中心に取材活動を行う。

1991年、ブリュッセル特派員となり現在に至る。

アンネ・フランク 心の旅路

一九九六年四月二十日 第一刷発行

著者〓谷口長世

発行者〓野間佐和子

発行所〓株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一 郵便番号 一〇一〇一
電話 編集 〇三―五五―三五九 販売 〇三―五五―三六五

製作 〇三―五五―三六五

印刷所〓慶昌堂印刷株式会社

製本所〓株式会社大進堂

©Nagayo Taniguchi 1996, Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、生活文化第三出版部あてにお願いいたします。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



ISBN 4-06-208177-6 （生活文化三）
定価はカバーに表示してあります。

アンネ・フランク
心の旅路

目次

1章 「アンネの家」との初めての出会い

ベルギーへ渡る 11

ヒトラーとアンネの父の戦地 19

今も衝撃を与える「アンネの家」 25

2章 ユダヤの人々とのめぐり合い

ブリュッセルの下町での単身生活 34

ユダヤ人女性が語る数奇な運命 42

3章 アンネ・フランクのルーツをたどる

十年ぶり、「アンネの家」の再訪 48

アンネはなぜ日本人に好かれるのか 52

ドイツ統一の現場を取材 54

フランクフルトで裕福に生まれたアンネ 59

4章 アンネ一家の悲運を決めた選択

アンネはなぜアムステルダムに來たのか 72

アンネの父とヒトラーは同じ軍隊で戦った 81

ヒトラーはオーストリア人だった 84

アムステルダムでの息づまる日々 92

5章 ドイツ軍侵攻からアンネ一家の逮捕まで

ドイツ軍がオランダを侵攻した日 106

ナチ・ドイツ占領下のオランダ 115

「ユダヤ人はすべて抹殺すべし」 116

ユダヤの民、離散の歴史 121

6章 息苦しい隠れ家の日々

聡明なアンネは未来を夢見た 126

アンネ一家をかくまったミップ・ギースとの対話

7章 ヒトラーの「わが人生の学校」ウィーン

ミップとヒトラーは同郷の出身 144

ヒトラーが貧困時代を過ごしたウィーンの場合 148

8章 ウェスターボルグ収容所への足跡をたどる

アンネ一家逮捕の密告者はだれか 163

アウシュビッツへの中継収容所 170

9章 アウシュビッツ生還者たちの証言

鉄道で行くワルシャワへの旅 194

生還者が語る収容所生活の悲惨 197

ガス室の様子を語る生き証人 209

10章 凍^いてついたベルゲン・ベルゼン収容所へ

「空腹が人間をすっかり変えてしまった」 232

生き証人を訪ねて、イスラエルへの旅 239

収容所での再会を語るアンネの親友 245

11章 エピローグ——そして戦争は終わった

アンネの父オットーの晩年 256

「死者はここで安息を得られるだろうか」 264

あとがき 275

装幀／渋川育由

装画・イラスト／おおば比呂司

写真協力／谷口長世

他は本文中に個別に表記

アンネ・フランク
心の旅路



1941年，12歳の頃のアンネ・フランク

©AFF/AFS

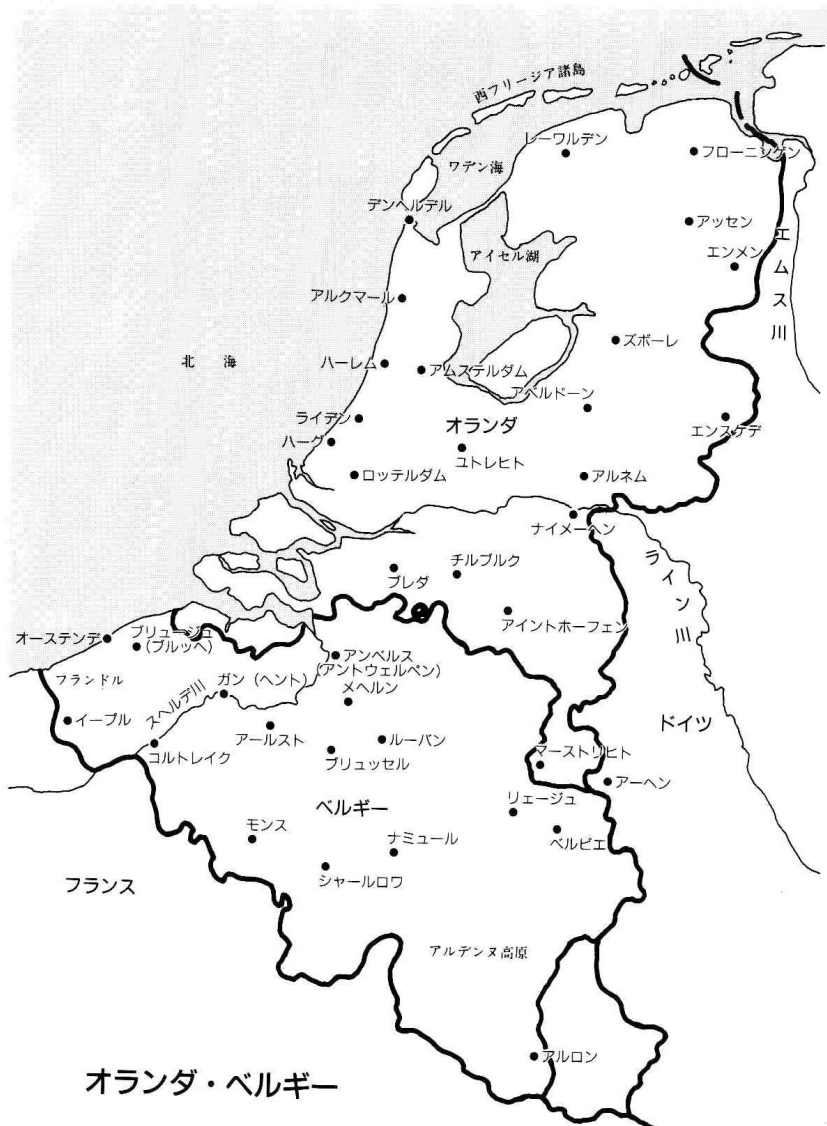
Amsterdam

the Netherlands

1 章

「アンネの家」 との初めての出会い





ベルギーへ渡る

アンネ・フランクは、これまで僕の人生にとっておよそ無関係な存在だった。

アンネと聞けば、「ナチの追っ手から逃れ、隠れ家で日記を書いた女の子」程度のイメージや、アンネの名を利用した商品が浮かぶぐらいだった。世界のどこに住んで、その後どうなったかなんて正直言って考えたこともなかった。

それがひょんなことからアンネの足跡を追うことになってしまった。少し回りくどくなるかもしれない。でも僕の身の上をかいつまんで話したら、その経緯をわかってもらえるかもしれない。

一九七八年初秋に、ブリュッセルへ旅立った。それ以前、東京では大学卒業後、取材・編集や史料収集の仕事をしながら新聞研究所に通っていた。そのうち海外に出て、欧州方面から日本の報道活動にたずさわりたいという計画があった。

へどこに拠点を置こうか

と考えていた。たまたま僕は、これから海外で学ぼうとする、主として若い人々向けの各国の事情と教育制度に関する本を編集していた。



その中でフランス、ドイツ、イギリスの三国のまるで谷底にある、ベルギーがとも面白い国にみえた。大国を観察し仕事の拠点とするのには、こんな目立たないところが好都合であるようにみえたのだ。

首都ブリュッセルにEC（欧州共同体。現在はEUと呼ばれる）やNATO（北大西洋条約機構）の本部があつたのも、

へひとつベルギーに腰を据え、仕事をしてみようかへ
と思ひ切る理由になつた。

その頃はECが経済、NATOが軍事と役割分担がはっきりしていた。平たく言う
と、お金と大砲だ。結局はこの両方が絡んで世の中は回っているのでは、というのが
漠然とした感じだった。

そうは言つてもベルギーとはいつたいどんなところか。何を食べているのか、そんな
なことも皆目、見当がつかなかった。グルメの方でなくともお笑いになると思うが、
ヨーロッパ人がよく魚を食べたり、米を食べたりするとは知らなかった。それから気
候も。

その頃、時々立ち寄つた地下鉄丸ノ内線、本郷三丁目の駅の近くの「麦」という喫
茶店の壁に、ベルギーの画家ブリュッゲルの『冬景色』が掛けてあつた。複製だけ

どもその絵を眺めると、

へいかにも寒そうな土地だね

と思われた。

ベルギー大使館の文化担当官は、

「まず国費給費の試験を受け、一年くらい勉強し直してから報道の仕事を始めたらどうか」

と言ひ、留学先にベルギーのブリュージュにある欧州大学を薦めた。欧州の統合や安全保障を専門にする一年制の大学院大学だという。お前のようなジャーナリストにはピッタリだと思うが、とその担当官は言つた。

一九七八年九月末に日本を發つた。パリへ降り、フランス国鉄TEE (TGVの前身) に乗り換え、ブリュッセルに着いた。この瞬間、事故に遭つてしまった。

TEEの客車は、スーツケースの置き棚が乗降口の傍らにある。その棚の下段に置いた荷物を引き出そうとしていたところを、慌てて背後から上段のスーツケースを引っ張ろうとした人の手が滑り、その荷物が僕の後頭部を直撃したのである。

「あれ、しまった」という声が耳の奥に残っているから、同じ客車にいた若い日本人



カップルであることに間違いない。この人達はそのまま立ち去ってしまい、ホームの上で半ば意識が朦朧としたまま気分が良くなるのを待つしかなかった。

こんなありさまで、到着からしばらくの思い出はぼんやりとしている。誰一人知らなかったの、ブリュッセルのホテルでしばらく回復を待つしかなかった。それでも一つ、そこだけ光の当たったように記憶している瞬間がある。

それは空腹になったのでホテルのベッドを抜け出し、ふらりと入った場末の喫茶兼軽便食堂のことだった。外は東京よりひと足早く冬が近づき、冷え込んでいた。客が小型の洗面器のような器に山盛りされたムール貝を食べていた。真似をして注文すると、しばらくして大柄の主人が湯気の立つ洗面器を、ガチャガチャと貝のぶつかり合う音をさせて運んできた。セロリーと胡椒、それに薄い塩味の利いた汁がたっぷり入っており、ムール貝を食べながらこの汁を飲むと、貝のだしがよく出ていた。

まだ頭がぼんやりしていたのだろう。うつかりシャツの袖でビールのコップをひっかけたしまい、足元でガラスの割れる派手な音がした。店のおやじさんが飛んできて、破片をかたづけモップで拭いてくれたが、僕はしよげ返ってしまった。

すると突然、歌声が上がった。見回すと、先ほどから陽気な会話を楽しんでいる様子の五、六人の高齢の男女が、僕の方を見て笑いながら、宴会で皆が斉唱するような